

生、人物寫生、風景寫生、模寫、作圖を課し又本科の學科は東洋繪畫史、有職古寶^(実)、遠近法、圖案法、審美學、應用博物學、和漢文學なりと 尙修業年限は本科五箇年、豫科、研究家は年限を定めずと。

(同第八卷第一号。明治四十二年三月)

○川端畫學校開校式 帝室技藝員川端玉章翁の主宰に係る同校は去九日開校式を執行せり 午前十時を以て式を始め先づ玉章翁校長として祝辭朗讀に次で職員山田敬中氏本校建設の沿革將來の目的意見を陳述し九鬼男爵の代理、正木校長、下條正雄氏の演説、職員總代高橋玉淵氏答辭ありて式を終り夫より餘興として狂言二番あり來賓三百餘名に開校紀念扇子を贈りて散會せり。

(同第八卷第十三号。同年九月)

川端畫學校は人事面において本校との關係が深く、設立主意書(『美術新報』第七卷第二十二号。明治四十二年二月所載)の執筆には正木直彦があたっている。これより本校入学者中に川端畫學校出身者が増え始めた。

⑤ 原田直次郎遺作展覽會

洋画家原田直次郎(明治三十二年十二月二十六日死去)の十四回忌にあたり、友人青山胤通、正木直彦、黒田清輝、森林太郎、徳富猪一郎、長沼守敬らの発起により、明治四十二年十一月二十八日上野

精養軒で紀念會が開かれ、同日正午より本校内で遺作展が開催された。肖像画を主とする数十点が展示され、それらの写真と旧友の懐旧談を載せた『原田先生紀念帖』が翌四十三年に原田直次郎氏紀念會によって発行された。

⑥ 第三回文展

明治四十二年十月十五日より同年十一月二十四日まで上野公園竹の台陳列館で第三回文展が開催された。日本画の部門は国画玉成會が妥協し、今回初めて新旧各派綜合の展覽會となり、審査委員の作では横山大観の「流灯」、竹内栖鳳の「アレタ立に」、寺崎広業の「溪四題」、川合玉堂の「高嶺の雲」等が、また、一般の出品では菱田春草の「落葉」と尾竹国観の「油断」(ともに二等賞)が好評を博した。平福百穂の「アイヌ」の出品もあったが、これは授賞の対象にならなかった。下村観山は出品せず、玉成會研究会展(同年十月六日より不忍池畔勸業協會で開催)の方に「小倉山」を出品して高く評価された。

西洋画は審査委員の作では岡田三郎助の「大隈伯爵夫人肖像」、鹿子木孟郎の「新夫人」、黒田清輝の「鉄砲百合」等が、また、一般の出品では中沢弘光の「おもひで」、山本森之助の「濁らぬ水」、吉田博の「千古の雪」(ともに二等賞)、山脇信徳の「停車場の朝」(褒状)等が好評を博した。

彫刻は審査委員の作では新海竹太郎の「原人」、一般の出品では朝倉文夫の「山から来た男」、荻原守衛の「北条虎吉肖像」(ともに

最高賞の三等賞」などが注目された。朝倉はほかに「猫」、「肖像」を、荻原もほかに「労働者」を出品している。

以下、文展（大正七年第十二回まで開催）については特に必要な場合にのみ記述する。

⑦ 吾楽会と吾楽殿

吾楽会は、明治四十二年、正木直彦東京美術学校長の首唱に岩村透、和田英作、結城素明らが賛同して結成された美術クラブである。福井江亭、合田清、岡田三郎助、古宇田実、千頭庸哉、小場恒吉、香取秀真ら現役本校教官らが多数参加している。ほかには彫刻家の米原雲海、山崎朝雲、陶芸の板谷波山、刺繍の菅原直之助、貝細工の浅井寛哉など、幅広い方面から新進の美術家や美術愛好家が集まった。最初の会員数は三十名ほどで、小場恒吉が幹事役となり毎月第三土曜日を期して集合し、互いの作品や図案を批評したり、興味深い図案があれば製作して同好者に分かつといった会であったが、古宇田によると「追々興味が増し遂には其品物の陳列所として、また會場としての建物を供給しようと特志家（八官町の小林傳次郎氏）まで出来て、遂に吾樂的の建物が新築されること云ふ事になった」（『美術新報』第九卷第三号。明治四十三年一月）という。こうして明治四十四年四月、京橋の八官町に誕生したのが吾樂殿（古宇田実設計）である。中国風、朝鮮風に日本在来の様式を混淆し、西洋商店の特徴を加味した折衷様式の个性的な二階建て建築であった。一階は吾楽会専用の陳列室兼売店、二階は展覽會場として使用し

た。最初の展覽會は、美術新報が主催した「新進作家小品展覽會」だった。次いで吾楽会主催の「団扇絵展覽會」が開かれ好評を博した。吾楽会は、工芸作家と一般の愛好家とをつなぐ場として大いに機能するが、より本格的な工芸美術団体の発足とともにしだいに失速し、大正十二年の大震災で吾樂殿が焼失すると事実上活動停止となる。以後は吾楽同人展覽會を開くのみとなる。